

梶田 祥嗣

(流通経済大学専任講師)

「三宅雪嶺と儒教—孟子観を中心に—」

かつて宮崎市定氏は、三宅雪嶺（雄二郎、1860-1945）の著である『冒頓』を内藤湖南（虎次郎、1866-1934）の代作であると看破した（「雪嶺と湖南—『冒頓』は代作か」）。湖南の衣鉢を継ぐ宮崎氏の推論は、山野博史氏も「情理を尽くした卓説」（「三宅雪嶺著作目録」）と評価するように相応の説得力をもつ。実は代筆もしくは共同執筆が疑われる雪嶺の著は、この『冒頓』のほかにも複数存在するとみられる。たとえば、没後に刊行された『東洋教政対西洋教政』（1956）では、雪嶺の著作では珍しく漢文原典の引用がそこかしこに散りばめられ、内容も比較的宋代儒教関連の記述が目立つことも奇異に感じられる。もちろん、儒医の家系に生まれ、幼少から漢学を叩き込まれた雪嶺は、常人以上に儒教の素養をもっていたことは疑うべくもない。ただ、雪嶺による中国関連の論著、特に漢籍を含むものを研究する場合、まずは湖南（もしくは他の代筆者）の手が及んでいるか否かの検証から着手しなければならないだろう。

これまで雪嶺と儒教に関する先行研究では、主に『王陽明』（1893）を対象として、「近代陽明学」の特徴から論じられることが多かった。ただ、雪嶺の儒教に対する関心は陽明学に踰越するものではなかったと考えられる。そこで発表者は上述の検証作業を踏まえたうえで、雪嶺と儒教との関係、特に彼の孟子観（もちろん、この点においても、湖南との関係を考慮する必要がある）を中心に、雪嶺哲学との関わりまでその射程を広げつつ私見を披歴したい。